

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02190

研究課題名（和文）家族介護者の離職予防および仕事と生活の調和に関する研究

研究課題名（英文）Research on preventing family caregivers from quitting their work to care for family members

研究代表者

桐野 匡史（KIRINO, Masafumi）

岡山県立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：40453203

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、家族介護者（ケアラー）が離職することなく、仕事と生活の調和を図るための知見を得ることをねらいとして、家族介護者（ケアラー）を対象とした質的調査（聞き取り調査）と量的調査（質問紙調査）を実施した。その結果、家族介護者（ケアラー）が仕事と生活の調和を図るためには、介護（ケア）役割がもたらす仕事や社会生活などへの影響を考慮しながら、家族介護者（ケアラー）がおかれている多様な状況を踏まえ、総合的かつ多角的な支援が必要になることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの家族介護者（ケアラー）研究の多くは、主に家族介護者（ケアラー）の「介護」役割を中心に研究成果の蓄積が図られてきた。しかし、本研究は家族介護者（ケアラー）を多様な生活行動、役割を担う「生活者」として捉え、「介護」という一側面のみならず、「介護」以外の他の生活面への影響も含めて彼らの生活実態を明らかにした点で、学術的意義があるものと考えられる。また、本研究の成果は、今後の家族介護者（ケアラー）支援研究の発展の一助になるだけでなく、介護（ケア）を担う家族の生活や権利保障のあり方を見直す社会的機運の醸成にもつながることが期待され、社会的にも意義のある研究であったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to obtain the basic information for preventing workers with family caregiving responsibilities from leaving their jobs and for balancing their work and family(social) life. We conducted a qualitative survey (interviews) and a quantitative survey (questionnaire) of family caregivers. The findings of this study suggest the need for comprehensive support for workers with family caregiving responsibilities based on their diverse living situations, such as the impact of caregiving on their work or family(social) life.

研究分野：社会福祉学

キーワード：社会福祉学 ケアラー 介護離職 家族介護 ワーク・ライフ・バランス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国の総人口のおよそ4人に1人は高齢者であり、このうち何らかの支援や介護が必要な高齢者は600万人を超える。しかし、介護保険制度の施行後、十数年が経過した現在も在宅介護の大部分は「家族」が担っており、最近ではこうした家族介護者(ケアラー)の「介護・看護を理由とした離職(以下、介護離職)」が大きな社会問題となっている。

介護離職は、短期的にみれば仕事役割と介護役割の両立から解放され、その負担は軽減されるように考えられる。しかし実際には、介護離職者の半数以上で、肉体的、精神的、経済的負担が増したことが報告されており¹⁾、必ずしも状況を好転させるわけではない。また、介護離職は、これまでの外部環境との接点が断たれるだけでなく、収入の減少や先行き不安から介護サービスの利用抑制等とも結びつきやすい。そのため、介護離職は、単なる「離職」現象の一側面としてではなく、状況によっては、他者が介在しにくい閉鎖的・閉塞的な介護環境(生活の場)に陥る、一定のリスクを伴う「離職」現象のひとつとして、慎重な見定めが必要である。

このような理由を背景に、家族介護者(ケアラー)を対象とした離職予防や仕事と生活の調和、仕事や家庭生活の状況等を踏まえた実証的研究が求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、家族介護者(ケアラー)が離職することなく仕事と生活の調和を図るための実証的知見を得ることをねらいに、家族介護者(ケアラー)の仕事と生活の実態と基本的特徴、仕事と生活の調和に関わる要因等について明らかにすることである。その成果を踏まえ、仕事と生活の調和の実現に向けた家族介護者の離職予防に資する社会的サポート・システムのあり方について提言する。

3. 研究の方法

本研究では、上記の研究目的を達成するために、文献研究のほか、質的調査(聞き取り調査)、量的調査(質問紙調査)を実施した。質的調査(聞き取り調査:2020年~2021年)は、調査協力が得られた家族介護者(介護経験者含む)から、インタビューガイドに沿って「介護に必要な時間のために生じた生活面(家庭生活、余暇生活、地域生活、職業生活)への影響」等に関する内容について尋ねた。そののちに、文献研究および質的調査(聞き取り調査)で得られた知見を踏まえ、量的調査(質問紙調査)を実施した。

量的調査(質問紙調査)は、A県内の居宅介護支援事業所38カ所を利用する高齢者の家族介護者200名を対象に実施した。調査は、無記名自記式の質問紙調査とし、各事業所の長に書面にて研究の趣旨、倫理的配慮など(自由意思による参加、途中辞退可能、個人情報保護、不参加による不利益は生じないことなど)に関する説明を行い、質問紙(調査票)の配布に関する同意を得た。また、家族介護者(ケアラー)に対しても、同様に書面にて説明を行い、調査に対して同意が得られた場合のみ、質問紙の返信により調査参加への協力を得た。調査期間は2022年7月~翌年2月にかけて実施した。なお、質的調査(聞き取り調査)と量的調査(質問紙調査)については、いずれも研究代表者が所属する機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

量的調査(質問紙調査)の内容は、家族介護者(ケアラー)および被介護者の基本属性のほか、介護により生じる(介護以外の)生活への影響、介護による疲労感、介護の継続意向、精神的健康、ソーシャル・サポート、就労状況、職業性ストレス、職場環境、離職意向、仕事や家庭生活に対する満足度等で構成した。また、自由記述として、仕事(職業生活)、家庭生活、地域生活、個人の生活(私生活)等の生活全体の調和を図るために必要な支援等について尋ねた。

最終的に、現在仕事をしていない(または離職した)家族介護者(ケアラー)を含む152名から回答を得た。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究の成果について、主に量的調査(質問紙調査)から明らかとなった仕事をしている家族介護者(ケアラー)の仕事と生活の実態に焦点を当てて整理した。その結果、職業性ストレスについては、仕事の量的負担に対するストレスはやや高い傾向にあるものの、仕事のコントロール(裁量性)に対するストレスは低い傾向にあること、現在の職場環境(家庭と仕事の両立支援環境)は、全体的に肯定的な回答(家庭と仕事の両立がしやすい職場環境であることを支持する回答)が多い傾向にあること、職場の人たちからのソーシャル・サポートは、概ね半数以上が何らかのサポートの受領が期待できる状況にあること、などが明らかとなった。

他方で、介護(ケア)役割による仕事(職業生活)への影響も認められ、このうち負の影響については、たとえば「被介護者(介護が必要な人)の予定に合わせて、仕事を切り上げなければならない」の設問に対して、半数以上の家族介護者(ケアラー)が「ときどきあった」「よくあった」と回答していたこと、などが明らかとなった。また、「介護を理由とした離職意向(介護のことがあるため、今の職場を辞めようと考えている)」については、約2割の家族介護者(ケアラー)が「ややそう思う」または「とてもそう思う」と回答していた。このほかにも、介護(ケ

ア) 役割による家庭生活、地域活動、個人的な活動に対する影響もみられ、介護(役割)が家族介護者(ケアラー)の他の生活面に多様な影響をもたらしていることが示唆された。一方で、介護(ケア)役割がもたらす正の影響(介護の経験が、職場や仕事の問題解決に役立つ、など)もみられ、家族介護者(ケアラー)支援の方向性としては、家族介護者(ケアラー)の生活の多面性とその影響の両価性(正負)を踏まえた多軸的な支援が必要になることが示唆された。

自由記述から得られた回答では、在宅で介護しながら、仕事(職業生活)や家庭生活、地域生活、個人の生活(私生活)等の生活全体の調和を図るために必要な支援として、介護者のゆとりや地域・隣人・家族等の理解、介護者同士のつながりなどの記述からなる「介護者と周囲の人々とのつながり」のほか、職場環境の整備、仕事と介護の調整などからなる「仕事と介護の両立・調整支援」、相談先の広報、専門職による支援、介護サービスの充実化、本人側の立場からの介護などからなる「専門機関・専門職による支援」、分かりやすい制度・仕組み、社会の变革、経済的支援などからなる「制度や仕組みの变革」といった4つの内容を抽出することができた。

なお、家族介護者(ケアラー)の生活の質にも配慮した仕事の継続には、職場環境等の環境的側面のみならず、家族介護者(ケアラー)の主観的側面の評価も必要になる。そこで、研究代表者らは、仕事に対する満足度や家庭生活に対する満足度を評価し、それらを従属変数としたパス解析による成果を報告した²⁾。その結果、「職場の人たちからのサポート」が「仕事に対する満足度」と有意な正の関連を示し、「大切な人からのサポート」が「家庭生活に対する満足度」と有意な正の関連を示すことが明らかとなった。この結果から、仕事や家庭生活での満足度を高めるためには、同一のサポート資源を活用するだけでなく、それぞれに異なるサポート資源を活用していく必要があることが示唆された。

このほかにも、仕事をしていない(介護離職者を含む)を対象とした自由記述からは、仕事をしている家族介護者(ケアラー)と同様の内容のほか、「介護者とケアマネジャーが1対1で対話できる機会の確保」や「経済的支援」の必要性に関する記述もみられた。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

これまでの家族介護者(ケアラー)研究では、主に家族介護者(ケアラー)の「介護」役割を重視した一面的かつ集約的な研究が行われてきた。しかし、本研究は家族介護者(ケアラー)を多様な生活行動、役割を担う「生活者」として捉え、「介護」だけでなく、介護以外の彼らの個人の生活も視野に入れた研究成果という点で大きく異なる。本研究で得られた主な成果から、家族介護者(ケアラー)の離職予防や仕事と生活の調和のためには、単に職場や介護といった「生活」の断片的な評価ではなく、それらを複合的かつ総合的に評価した社会的サポート・システムの必要性が示唆された。これらの知見は、今後の家族介護者(ケアラー)支援研究の発展の一助になるだけでなく、介護(ケア)を担う家族の生活や権利保障のあり方を見直す社会的機運の醸成にもつながることが期待され、さらなる継続的な研究が必要であると考えられる。

<参考・引用文献>

- 1) 三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング. 平成 24 年度仕事と介護の両立に関する実態把握のための調査研究事業報告書. 2013.
- 2) 桐野匡史, 松本啓子. 要介護高齢者等の家族介護者(ケアラー)におけるソーシャル・サポートと仕事および家庭生活に対する満足度との関連性. OPU フォーラム 2024.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松本啓子、林信平、伊東美佐江、金地昌枝、曾根美沙、田邊ルミ、土器悦子、桐野匡史	4. 巻 23(5)
2. 論文標題 地域で暮らす在宅療養者の急変時対応に関する研究の概観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 66-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本啓子、林信平、伊東美佐江、金地昌枝、曾根美沙、田邊ルミ、土器悦子、桐野匡史	4. 巻 22(13)
2. 論文標題 地域ケアにおける在宅療養者の急変時対応に関する研究の概観	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 70-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 桐野匡史、松本啓子
2. 発表標題 要介護高齢者等の家族介護者（ケアラー）におけるソーシャル・サポートと仕事および家庭生活に対する満足度との関連性
3. 学会等名 OPUフォーラム2024
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Matsumoto K, Hayashi S, Tanabe R, Doki E, Ito M, Kirino M.
2. 発表標題 PERCEPTIONS OF FAMILY CAREGIVERS LEAVING CAREGIVING ABOUT LIVING WITH MULTIPLE ROLES
3. 学会等名 ICN Congress 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Matsumoto K, Hayashi S, Tanabe R, Doki E, Ito M, Kirino M.
2. 発表標題 PERCEPTIONS OF CAREGIVERS MATURE IN MULTIPLE ROLES
3. 学会等名 ICN Congress 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松本啓子、林信平、芳我ちより、伊東美佐江、桐野匡史
2. 発表標題 老々介護を別居で支える家族介護者の認識－介護離職した長男に着目して－
3. 学会等名 香川県地域包括ケアシステム学会第5回学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	松本 啓子 (MATSUMOTO Keiko) (70249556)	香川大学・医学部・教授 (16201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------